

社会科分科会の報告 (文責 小野寺)

司会者：角谷悦章・渋谷美和子 共同研究者：小野寺徹・平井敦子・前田輪音

今年度の分科会では、午前にレポート報告、午後はレポート別に分かれての討論とテーマ「社会科のまなざし」ということで角谷による基調報告を受けての討論を行った。ここではレポート報告とテーマ討論の報告をする。

1. レポート報告について 7本の提出のうち報告のあった5本を取り上げる。

1) 「オホーツク民衆史講座の再検討」(渡来 和夫)

オホーツク地域自治研教育部会で、オホーツク民衆史講座で長く写真を撮っていた佐藤毅氏の写真集「野に祈る」を復刻出版、それに合わせて教材化できるものを作ろうという取り組みが始まった。今後、オホーツク民衆史講座の財産を、地域教材化しその実践を広げ、深めていくことを目指している。

2) 「関東大震災100年地域に根ざした防災学習 その3」(飯塚 正樹)

2018年のブラックアウトの体験から防災のことをきちんとやることは主権者教育であることから防災学習を構想。昭和56年洪水を学ぶと防災・減災のはなしの防災講話。地元の自治会と避難所体験。現地で胆振東部地震について学ぶ。災害時の障害者の自助、障害者が取り残されている現状をうけて自治会、保護者、大学生も加わってのグループ討論や災害時の外国人支援をテーマのワークショップなどの取り組みを行ってきた。

3) 「生徒から学ぶ民主主義」(杉山 拓哉)

今、学校現場で真なる「民主主義」を1つでも多く実現しなければと考えた実践。学校祭の時期にテーマの決め方の話し合いや多数決そのものについて考えさせた公共の授業。さらに学校現場にある「基本的人権の課題」「ブラック校則」「同調圧力」などを「民主主義」にも発展する話であると考え、向きあっている。

「教え子を再び戦場に送らない」この言葉は、最近毎日生徒に対峙するとき、心の中で思い出している。では、戦場に送らないために自分ができることは何か？教員として今、何をすべきか？日々、その問いかけを自分に対して行いながら実践を行っている。

4) 「高校生議会における生徒の変容に関するレポート」(米家 直子)

高校生議会は、高校生が議員役となり議場において首長その他に質問をしたり、意見書を取りまとめて発表したりする取り組みである。その学びは「主権者としての技能の習得」の教材でないかと表現することができる。投票に行くべきだという感覚や政治への参画欲求を育てていこうとするカリキュラム構成のためのヒントを提供している。教育効果は、合意形成に関する技能が身につくということと地域課題について参画感を持てることである。2つの事柄を通して、様々な場面でのコミュニケーションの技法が変化するだけでなく、ものごとについて多様な側面から考察するまなざしを持つようになる。またものごとを捉える時間軸も伸びる。

5) 「戦争の無い社会の作り方」(平井 敦子)

報告は義務教育として9年間勉強する状態に追われる人たちの最後の出口、中学校の公民的分野の最終段階、単元としては「地球社会と私たち」。生徒たちと「戦争」「平和」「未来」について今までやったことを土台にしてこれからを考える授業報告。冷静に社会をみていく主権者をどう育成するか。どうしたら、戦争のない平和な社会をつくることができるのだろうか。戦争を因数分解して戦争要因バスターズ(退治)する方法をグループで考えるなどさまざまな実践。最後に書かれた次の内容が心に残った。「未来の選択肢はたくさんあるよ。世の中の常識が変わることを歴史は証明してきたから！」と、自分達がなしえていない理想実現へのバトンを、次世代の彼らに託している。自分の一票なんて、自分ひとりが頑張ったって、となりそうな空気の中で、「いや、そんなことはないさ、この一滴で変わるかも」というハチドリの一としづくを彼らの胸に「武器」として蓄えてくれたらいいなと思う。

2. テーマ討論

ウクライナ・ロシアやガザ・イスラエルの問題をどう見るのか。社会科の先生の役割の一つは世間で言われることとは違う真実が本当はこうだ。だからこれをベースに考えなければいけないみたいな授業を作る役割を結構担ってきたが、それが簡単にできなくなったと言うことに、この後どう対処していくのか。社会科の先生は今、どんなまなざしを持ったらいいいのか。という問いかけに対して討論を行った。

- ・現局面で社会科の教員としてこういう事実直面してこういうふう考えるって言うことを伝えるってことが大事なんじゃないかって思う。少なくとも沈黙して問題がないかのようにするのではなく、取り上げることによって、自分なりの興味をもてることになる。
- ・生徒は、教員の歴史の見方に強い影響を受けてしまう。大事にしてほしいのは弱者へのまなざしだ。
- ・「一旦戦争が始まったらすぐ終息しないことを今皆さんはリアルタイムで見えていますね」と言っている。今起きている戦争もかつての第一次世界大戦、それ以前またその後の戦争の歪みが終息されないが上に起こっているのであって、一旦戦争が起きるとそれがまた次の戦争につながる認識で歴史を学ぶのが大事。
- ・歴史的な背景を遠回りでもちゃんと教えることによって生徒の気づきが色々あるのだと思う。
- ・あと20年ぐらいすれば、自分の知人が戦争で殺されたとか、そういう経験のない平和ぼけた国家ができる。それがとっても素敵なことではないのか。
- ・現在起きていることを使って過去の事例と引き合わせてやっぱり戦争ってどういう時に引き起こされるか、権力者はどういう時に戦争に踏み出すかを学ぶ機会である。
- ・殺戮できる状況を作られてしまったときに最後に人間の良心で声高に国際社会に絶対やめろと言ったり行動したりする根っここのところを教えたいなと思っている。

3. 社会科分科会の感想

- ・民主主義っていうのを少しでも学校現場は守りながらそれを体現しながら生徒に接していかなければ生徒を危険な目に合わせてしまう。
- ・私たちが住んでいるこの国で何が進行しているのかを素通りしてはいけない。なかなかやりづらい、慎重さも求められる中でどうしたらいいのか。
- ・ガザの問題でも弱者の立場に立って考える。現地の人がどういう風な状況になっているかその視点を忘れないということ
- ・戦争は最大の人権侵害だけど、小さな人権侵害って学校にいくつもあると思う。人権が保障ないところでは教育ができないし、また教育を受けていないと人権の価値もわからない。その人権と教育の関係は切っても切れないもの。
- ・全国统一基準の金太郎飴を生み出す実践じゃなくて、それぞれの先生が地域にいて、その地域の実情とか生徒の実態とかに合わせて授業をどう作っていくのか、その実践が深い。
- ・思考だけは停止しないように自分でやっぱり考えなきゃいけないし、子供にもそうふうに育てなければならぬと思った。
- ・1つは民主主義議論の弱まり、そして多数決、そして安易な二項対立、非常にタイパコスパのいい結論を求める傾向は、全てにおいて小さい頃から貫かれていると思う。子供たちは単なる多数決で決まることに矛盾を感じている場面はいっぱいある。でも矛盾が解消されないから、諦めになっていく。自分では判断できないから誰かに任せようってなっていくのだろう。
- ・平井さん、米家さんをはじめ優れた実践報告があった。それを多くの人たちに聞いてほしいし届けたい。